

## 伝記文学を考える

今村 泰子\*<sup>1</sup>

「アルルの病院はコの字をした二階建ての建物で、中庭にはさまざまな花が咲き乱れ、しだが生い茂り、砂利を敷いた歩道があった。」

日本を訪れたことのあるアメリカの伝記文学のおそらく最高峰であるアーヴィング・ストーン (Irving Stone, 1903-1989) の数多い作品の第二作である *Lust for Life*, 1934 (日本語訳 新庄哲夫) の一くだりである。

主人公のゴッホはその数奇を極めた生涯、正に天才とはこういう人だと言われる画家である。もう何十年前も前劇団民芸が、滝沢修を主役にして、彼の生涯を「炎の人」と題して上演したことがある。

強烈な作品群を覚えている人は無数にあるであろう。

私はふと中野好夫訳のゴーギャンを描いた小説を思い出す。この人もゴッホの親しい友であった。奇人である点二人は共通している。

ストーンはアルル時代のゴッホの強烈な作品群に触れ、この画家の足跡を辿ってみたいという衝撃を感じたのがわかるような気がする。

主人公の住んだ土地、関係のあった人々との会見、残された書簡などを徹底的に調べる……。こういった手紙を当然とる。だが小説とするための対話、プロットなどの要素も必要になって来る。事実の再構成だけでは小説にならない。想像力も必要である。

しかし人の生涯には時間的な空白、あるいは空間的な空白がある。しかもゴッホは狂気をも含めて実に複雑な精神形成、精神構造の人である。

ここは小説家の、いってみれば、特権の舞台である。事実は重んじなければならない。だがその事実にもせよ絶対的なものではない。私たちにはわからない病理的な問題もある。臨床心理学が取り上げるいくつかの点をこの学科に所属することになった筆者はこれから考えてみたいと思う。

英文学者としても、評論家として優れた中野好夫がその著『人間のうらおもて』(筑摩文庫所収)の中で、人間の在り方を論じている。いかにも中野好夫らしく歯に衣を着せぬ論法であるが、その中で論じられている人間の二面性については考えさせられる問題がある。この本の中で論じられている人物の一人、イギリスの国民的英雄のネルソン提督についての Robert Southey 作 *The Life of Nelson* は不朽の名作であるが、この英雄が実は堂々と不倫を犯している。しかしかれの没後、国家はその不倫の相手であったハミルトン夫人にまで年金を支給している。私たちにとっては不可解なことである。

---

\* 1 立正大学心理学部助教授

中野好夫が取り上げているのはネルソンだけではない。かれの最高の著作は『徳富蘆花伝』(三巻)であろう。

トルストイを慕ってはるばるロシアのこの文豪を訪れたいきさつもくわしくのべられている。そのトルストイ自身も著名な伝記文学者 Henri Troyat (1911~) によれば様々な矛盾に富んだ人である。

人は自らを語るとき、それはしばしば自讃に終わることもある。

モーパッサン Guy de Maupassant (1850~1893) の *Pierre et Jean* (1889) に序を寄せている師フロベールは述べている。

“Ce qu'on dit de soi, c'est toujours poésie.”

「人が自分について語るときはいつも詩である。……」

『ボヴァリー夫人』 *Madame Bovary* を書いたフロベール Gustave Flaubert (1821~188) の写実の適格性は定評がある。筆者はここに師対弟子の問題を考えさせられる。

筆者はこうした問題を出発点として伝記というものを探求して見たいと思う。

一九三二年に出版された H・G・Wells (1866~1946) が自伝について興味ある本を書いている。その序文がなかなか含蓄に富んでいる。

世界史についてひろい知識を持っているこの人がその序の七ページに述べている言葉を考えて見たい。

Imperfection and incompleteness are the certain lot of all creative workers. We all compromise. We all fall short. The life story to be told of any creative worker is therefore by its very nature, by its diversions of purpose and its qualified success, by its grotesque transitions from sublimation to base necessity and its pervasive stress towards flight, a comedy. The story can never be altogether pitiful because of the dignity of the work; it can never be altogether dignified because of its inevitable concessions. It must be serious, but not solemn, and since there is no controversy in view and no judgment of any significance to be passed upon it, there is no occasion for apologetics. I shall try to set down the story of my own life and work, up to and including its present perplexities.

ウェルズは女流作家 Rebecca West (1892~) との間にやはりのちに作家になった Anthony West を儲けている。

ところが息子は母親を厳しく批判している。こうした人間関係を筆者はこれから追及しようと考えている。

イギリスの文学史を読むと、他の多くの作家に比べて圧倒的に人の目を惹く人がある。その一人は余りにも有名な Samuel Johnson (1709-1784) である。わが国でも、もう20年以上になると思うが、この人の編んだ辞典の翻刻版が出ている。これは英語という言語をしみじみ味わうというよりも、当のジョンソン博士の強烈な人柄がうかがえるという点でより多く知られている。

この辞典、*Dictionary of the English Language*, (1755) というのがその題名である。

Johnson を師と仰ぐ James Boswell (1740-1795) の書いた *The Life of Samuel Johnson*, L. L. D は師の機知と魅力を余すところなく描いている。

Boswell, James (1740-1795) Scottish biographer and man of letters. Boswell is best known as a diarist and as the biographer of Dr. Samuel JOHNSON, He was called to the Scottish bar in 1766 and practiced law for twenty years. He met Dr. Johnson in 1763 and visited him yearly. on vacations to London until he moved there. In 1786 he settled permanently on London, entered the English bar, but met with little success there. His literary fame and success began with *An Account of Corsica* (1768), a defense of Corsica's abortive struggle for freedom against the republic of Genoa. In 1773 he accompanied Dr. Johnson on a journey to Scotland. His account of the trip, *The Journal of a Tour to the Hebrides with Samuel Johnson, LL.D.*, appeared in 1785, by which time he was already working on *THE LIFE OF SAMUEL JOHNSON, LL.D.* Boswell was a man of great wit and charm; his personality was marked with extreme turns of hypochondria and gaiety. He noted with amusement the fact that, while he defended Corsican liberty abroad, he was opposed to further extensions of liberty at home. His papers are full of detailed plans for reform and admonitory addresses to himself, such as: "Desperate. This day, *Easter* rouse. Be Johnson. You've done no harm. Be *retenu* [restrained], & c. *What* am I?" Occasionally he even took his own advice.

辞典と言えば、筆者はふと大槻文彦 (1847 - 1928) の『大言海』を思う。しかし同時に非常に対比的な芳賀矢一 (1867 - 1927) の『言泉』を思い出さずにはいられない。後者は編者の人間性がうかがえる。

英語の辞書と言えば浩瀚な *The New English Dictionary* を思い浮かべる。"On Historical Principle" とうたった編者たちの心意気がしのばれる。

だがここで忘れてならないのは、著名なサンスクリット学者 William Dwight Whitney (1827-1904) の編んだ *Dictionary and Cyclopedia of the English Language* を忘れることは出来ない。これは正に芳賀八一の『言泉』に匹敵する。そこには英語という言葉に適切な引用文によってしみじみ味わうことのできる世界がある。

またここに *Chamber's Cyclopedia of English Literature* という貴重な資料がある。筆者が Johnson を取り上げたのも実は上記の *Cyclopedia* の中の Alfred Ainger の記事に触発されてのことであった。少々長いけれどもその項目を引用してみよう。

"Lamb's place in literature is unique and unchallengeable. As a personality he is more intimately known to us than any other figure in literature, unless it be Samuel Johnson. He is familiar to us through his works, which throughout are composed in the form of personal confidences; through his many friends who have loved to make known his every mood and trait; and through his letters, the most fascinating body of correspondence in our language. It is a dangerous thing to say, but it may be doubted whether, outside a necessarily limited circle, his works are read so much for their own sakes as for the light they throw upon the character of their author. It is the harmonious concord of dissonances in Lamb that is the secret of his attraction. The profound and imaginative character of his criticism, which at its

best is unerring, and with it the reckless humour of the Bohemian and the *farçeur*; the presence of one lamentable weakness serving to throw into stronger relief the patient strength of his life-struggle; his loyalty and generosity to his friends, even when they abused it most; and all this flowing from one of the most beautiful acts of devotion in the records of self-sacrifice: the wild fun of Trinculo and Stephano, alternating with the tenderness of Miranda and Ferdinand, or the profound philosophic musings of Prospero --- and all these, like Ariel, now 'flaming distinctly,' now 'meeting and joining' --- it is this wondrous blending of opposites that has made Lamb, save to the 'sour-complexioned' and matter-of-fact, one of the most dearly loved among English men of letters, and with every sign that this love is one which no changes of taste are likely to diminish."

Alfred Ainger

(Chambers's Cyclopaedia of  
English Literature, Vol. III)

ここで Ainger が口を極めて愛して止まない Charles Lamb (1775-1834) がある。彼の筆名は Elia であった。わが国でも広く知られる「エリア随筆集」(Essays of Elia) を挙げよう。

私がこの人に惹かれたのは、福原麟太郎教授 (1894 - 1981) の不朽の名作『チャールズ・ラム伝』に触れたことと Arnold Bennett (1867-1931) の *Literary Taste* (文学趣味) を岩波文庫版で読んだのがきっかけであった。殊に後者は英文学専攻でなく、「チボー一家の人々」その他の作品の名訳を以って知られる山内義雄氏 (1984 - 1973) の手になるものであったことが忘れられない。山内氏の業績はわが国のみならず、フランスでも高く評価され、叙勲の栄に浴したことも付記したい。

### The Old Familiar Faces

Charles Lamb

I have had playmates, I have had companions,  
In my days of childhood, in my joyful school-days ----  
All, all are gone, the old familiar faces.

I have been laughing, I have been carousing,  
Drinking late, sitting late, with my bosom cronies ----  
All, all are gone, the old familiar faces.

I loved a love once, fairest among women;  
Closed are her doors on me, I must not see her ---  
All, all are gone, the old familiar faces.

I have a friend, a kinder friend has no man;  
Like an ingrate, I left my friend abruptly;  
Left him, to muse on the old familiar faces.

Ghost-like I paced round the haunts of my childhood.  
Earth seemed a desert I was bound to traverse,  
Seeking to find the old familiar faces.

Friend of my bosom, thou more than a brother,  
Why wert not thou born in my father's dwelling?  
So might we talk of the old familiar faces---

How some they have died, and some they have left me,  
And some are taken from me; all are departed;  
All, all are gone, the old familiar faces.

.....みんな、みんないなくなったなつかしいあの顔、この顔.....

平易な言葉で綴ったこの詩の中に、世俗に汚されない美しい魂を見るような気がする。

Lambの美しい文をArnold Bennettが取り上げている。かれが*Literary Taste* (文学趣味)を発売したのは、1909年、かれが42歳の時であった。この中でかれはしばしば引用されるLambの“Dream Children”の全文をここに収めた。筆者もBennettにならって山内義雄訳の「幻の子供 夢物語」の全文を引用したい。(岩波文庫版 pp. 54 - 64)

## 幻の子供

### —— 夢物語 ——

子供といふものは、年長者についてその人達の子供時分のお話を聞きたがるものである。想像の翼をひろげて、話にだけは聞いてゐるが、一度も見たことのない大伯父さんとかお祖母さんのことを心に描いてみたがるものである。先夜私の子供たちが、その曾祖母さんのフィールド(譯註、ラムの祖母メアリー・フィールド)のことを聞きたがつて私のまはりに集つてきたのも、かうした氣持からであつた。この人はノーフォーク(譯註、ハーフォードシャを指す)の大きなお屋敷(子供たちや父親の今住んでゐる家よりは百層倍も大きな)に住んでゐた、そしてそのお屋敷といふのは、<sup>(一)</sup>『森の子供たち』といふ民謡で、近頃子供たちにも馴染み深くなつた、あの悲劇の行はれた場所であつた——少くとも、その地方では一般にさう信じられてゐた。たしかに、子供たちと非道な伯父の物語が、<sup>(二)</sup>駒鳥の件まで残らずすっかり大廣間の暖爐の上の飾り板に彫りこまれてゐたのがみうけられたことは事實である。ところがある馬鹿なお金持の人が、それを取りのけて、その代りに、物語何一つ彫りつけてない當世好みの大理石の品を取りつけたのだつた。話がこゝまできたとき、アリスは、その子の懐しい母親が生前よくみせた顔をそつくりの顔をして

みせた、その面差しはあまりに穏かで不都合を咎めだてしてゐるとは思へないほどであつた。それから私は話を續けて、曾祖母さんのフィールドがたいへん信心深くて心がけの良い人であつたこと、實はその大きなお屋敷の女主人ではなくて、その持主から頼まれてただその世話をしてみただけのことであつたが（とはいつても、みやうによつては、そのお屋敷の女主人といつても一向さし支へないのではあつたが）誰にも敬愛されてゐたこと、そのお屋敷の持主といふのは、どこか近くの郡に買ひ求めたずつと新しいずつと當世風の屋敷の方を好んで、そちらに住んでゐた、が曾祖母さんは相變らず、まるで自分の持家の風にそこに住み、存命中は、まがりなりにも大家の體面を保つてゐたこと、そのお屋敷は後には荒れ果ててしまつて、ほとんど取り壊され、古い飾りつけなどはすつかり剥ぎとられて、持主の例の家に運び去られ、そこに取りつけられたのだつたが、そのぶざまな様子は、ウェストminster寺院にある古びた墓石を持つていつて、C夫人のけばけばしい金ピカの客間に据ゑつけたなら、こんなことにもならうと思はれるほどのものだつたと話した。これを聞くとジョンは「そんな事をするとは、なんてお馬鹿さんなのだらう」と言はんばかりに、ニヤリと笑つた。それから私は、曾祖母さんがたうとう亡くなつた時には、その葬式には、數里四方の近在の貧しい人達ことごとく、それに幾分かは身分のある人達も參列して、曾祖母さんの靈に追悼の意を表したが、それもこれも、曾祖母さんがたいへん心がけが良くて信心深い人であつたればこそそのことで、その心がけの良さといふものは、祈禱書の詩篇をすつかり、どころか聖書の大部分も暗誦してゐたほどだつたと話した。それを聞いて可愛いアリスはマアといふ風に両手を擴げた。それから曾祖母さんのフィールドは、昔は背の高いすらりとした、姿の良い人であつたこと、若い頃には一番の踊の名手と謳はれたことを話した——こゝでアリスの可愛い右足は知らず識らず踊の拍子をとりに始めたが、私が恐い顔つきをしてゐるのを見て、やめてしまつた——一番の踊の名手、それも郡で一番の踊の名手であつたと話すつもりであつた、が癌といふ恐ろしい病氣になつて、その痛みのために身體は曲つてしまつた、がさすがの病氣も、その元氣だけは曲げも撓めもならず、普通にすくすくと伸びやかであつた、といふのも心がけが良くて信心深ければこそであつた。それから曾祖母さんはこの大きな寂しい家の寂しい部屋にいつもたゞ一人で寝たこと、二人の幼児の幽霊が眞夜中に、曾祖母さんの寝てゐる近くの階段をスーッと上り下りするのを確かに見たと信じてはゐたが、「そんな風な無邪氣なものは私をどうともしないでせう」と言つたこと、その頃私は女中と一緒に寝てゐたけれども、曾祖母さんの半分ほど心がけよくもなく信心ごころもないこととて、いつもおつかなびづくりにあつたこと——それでも幼児の幽霊は一度も見たことはなかつたことを話した。するとジョンは兩眉をグンと吊りあげて、勇氣があるぞといふ風な顔つきをして見せた。それから私はこの人は孫たちにはたいへん親切で、日曜日や祭日にはその大きなお屋敷に呼んで下さつたこと、とりわけ、私はいつもそこでたゞ一人幾時間も過し、ローマの皇帝がたであつた十二人のシーザーの古びた半身像をじつと見入つて、はてはその古い大理石の頭が生き返つてくるやうに思はれたり、また自分の方がともどもに大理石になつてしまひさうにも思はれたりしたこと、すり切れた窓掛けやびらびらしてゐる厚い帷張や、金具の鍍金のほとんど剥げ落ちてゐる彫刻のある櫺の鏡板のついた、廣いがらんとした部屋のいくつもある大きなお屋敷をうろつき廻つたり、——またある時は廣い古風な庭園を、ときをり獨りぼつちの園丁と行き會ふ外には、ほとんど我が物顔にうろつき廻つて

——ついぞ疲れを知らなかつたこと、それから油桃や桃が土堀に垂れ下がつてはみたが、禁斷の木の實のことゆゑ、(時には誘惑に抗しかねたこともないではなかつたが) ほとんどもぎ取らうなどとしたことなかつたこと、それといふのも一つには又、私は陰氣な様子をした水松の古木や縦の木の間を逍遙し、見る目を喜ばせるほか何の役にもたない赤い木の實や縦の實をとつたり——廣々とした庭の快い香に包まれて水々しい青草の上に寝轉んだり——<sup>オランダ</sup>香橙の温室で日なたぼつこをして、果ては自分もあの有難い温氣の中に香橙やライム橙ともども熟してゆくのではないかと思つたり——庭の奥にある池の中をあちこちと勢よく泳ぎ廻る鮪や、その無遠慮に跳ね廻る鮪を嘲笑するかのやうに水の中ほどのそこゝに黙々として不機嫌顔に大きな<sup>バイク</sup>梭魚がおさまつてゐるのを見たり——かうした肉體は使はないで眼の忙しい慰みの方が、桃や油桃や香橙やその他子供を釣り寄せる食物の類の美しい味よりも遙かに有難かつたからであるといふことを話した。これを聞くとジョンは一房の葡萄をそつと皿の上に置き返した。アリスにも見つかつてゐたので二人して顔あふつもりでゐたのだつたが、さしあたり今は不用のものと考へて進んで手離す氣になつたらしかつた様子である。それから私は一段と調子をはりあげて、曾祖母さんは孫たちを皆可愛がつたが、お前たちに伯父さんにあたるジョン・L——(譯註、ジョン・ラムを指す、作者の兄) をとり分け可愛がつたらしく思はれる、といふのは伯父さんは美しく元氣潑刺とした青年で、家では王様格であつたからである、自分たちのやうに、人のゐない隅つこの方でぼんやりしてはゐないで、自分たちと同じ惡戯小僧の年頃にはもう、一番の荒馬に跨がつて、朝の中に郡の半分以上も乗り廻し、狩獵の人が見つければ、その仲間に加はるといふ風であつた——それでゐてその古い大きな屋敷と庭園とが好きではあつたのだが、あまりに元氣がよくて、屋敷内に始終閉ぢこもつてゐるわけにはゆかなかつたのである——そして伯父さんが立派に成人した時には、美男に加へて勇敢でもあつたので、誰も皆賞めそやしたが、とりわけ曾祖母さんは感心しきつてゐたこと、少年の頃私が足を痛めて、その痛みのために歩けなかつた時には、幾里も私をおぶつて歩いてくれたこと——といふのは私とは相當年の開きがあつたからでもあるが——後になつて伯父さんも亦足を痛めたが、いらいらして痛がつてゐる時に、(殘念ながら) 私は必ずしも十分に思ひ遣りがあつたとも思はず、又私が足を痛めてゐた時伯父さんがどれほど親切にしてくれたかといふことも十分には憶ひ出しもしなかつたといふこと、又伯父さんが亡くなつた時には、死んでまだ一時間とはたゝないのに、もう餘程以前の出來事のやうに思はれたが、生死の隔りはかうも甚しいものであらう、それから初の中は伯父さんの死をかなりよく、こらへてゐたと自分でも思ふほどであつたが、後になつては始終そのことが心につきまとうて離れず、ある人達のするやうに、又私が死んだとしたらこの伯父さんがやりさうに思はれるやうに、聲をあげて泣いたり、悲嘆にくれるといふほどではなかつたけれども、それでもその人のゐないことが終日淋しくて、その時までこれほどこの伯父さんを愛してゐたとは氣づかなかつたことを話した。今更に私はその親切が戀しく、その意地悪さが懐しく、このまゝ別れてしまふよりは、もう一度生き返つてきてくれて、喧嘩をしてみたい(時々二人は喧嘩をしたものだつた) とさへ思つた、そして伯父さんを失つた私の心細さは、ちやうどお前達の伯父さんが氣の毒にお醫者様に脚を切り取られた時の心細さのやうなものだつたと話した。すると子供たちはワツと泣き出して、さては自分たちの今着けてゐる小さい喪章はこの伯父さんのジョンのためのものでしたかと訊ね、顔をあげて伯父さ

んのお話はもうやめにして、亡くなつた美しいお母さんのお話をして下さいとせがんだ。それで私は七年間といふもの、時には希望を持ち、時には失望しながらも、根氣よく、美しいアリス・W・N (譯註、ラムの若き日の戀人アン・シモンズを指す) に求愛したことを話し、そして子供たちに了解できるていどに、はにかむだり、<sup>さから</sup>抗つたり、<sup>ことは</sup>拒絶つたりする娘心といふものを話して聞かせた——その時、ふとアリスの方をふり向くと、母親のアリスの魂がそつくりそのまゝ娘のアリスのまなざしにあらはれて、今私の前に立つてゐるのは二人の中のどちらなのか、そのつやつやしい髪の毛の持主は一體誰なのか判らなくなつてきた。さうして私がじつと見つめてゐる中に、二人の子供の姿は次第々々に後退<sup>あとさり</sup>して薄れてゆき、はてはたゞ二つの悲しげな顔のみが遙か彼方に見えるばかりであつた。そしてその姿は何も言はないが、不思議とこんな風に言つてゐるやうに思へるのだつた。「私達はアリスの子供でもなければ、あなたの子供でもありません。いえ、子供でもなんでもないのです。アリスの子供たちはパートラム (譯註、アン・シモンズの夫となりし人) をお父さんと呼んでゐます。私たちは影も形もないものです、影も形もないといふにさへあたらぬものなのです、夢なのです。あなたがアリスと結婚したとすれば、ひよつとしたら生れ出たかもしれないものにすぎないのです。生れ出て名前を持つやうになるまでには何百萬年も待ちこがれリースイ (譯註、地獄にある河の名で、靈魂はその河岸に坐して、肉體の與へられる日を待つといふ) の河岸で待つてゐなければならぬのです」——ふと目覺めると、私は獨身者の脇掛椅子に静かに腰を下ろして、ぐつすり眠りに落ちてゐたのであつた、相も變らず忠實なブリジェット (譯註、作者の姉メアライ・ラム) は傍にゐてくれたけれど——ジョン・L (即ちジェイムズ・エリア) は永遠にこの世を去つてしまつたのであつた。

譯註 (一) パーシイの『古謠拾遺集』中に收められてゐる民謠で、リチャード三世がその甥を殺害した顛末を歌つたものといはれてゐる。その梗概は、ノーフォークのある紳士が死に臨んで、二人の幼兒を、莫大な財産と共に子供たちの伯父に託した。心よからぬ伯父は財産横領の目的で、幼兒の殺害を惡漢に依頼した、が途中惡漢は慈悲の心をおこして、子供たちを「ウェイランドの森」に捨てた。その夜子供たちは寒さと恐怖のために死んでしまつた。やがて惡漢の自白によつて非道な伯父は罪にとはれ獄死した。

(二) 『森の子供たち』は二十節からなつてゐるが、第十六節に次の句がある。

この愛ほしき<sup>いと</sup>兄妹<sup>ほらから</sup>を  
埋葬<sup>はふ</sup>する人とてなかりけり、  
憐れと思ひ 駒鳥は  
亡骸<sup>むくろ</sup>に木の葉うちかけぬ。

Lamb がこれを書いた時は50歳に手も届こうという年であつた。兄Johnの死がまだ彼の心に重苦しくのしかかっていた。チャールズは若い頃アン・シモンズという少女に恋したけれども、その恋はみのらなかつた。独身を保っていた彼は、精神病の発作を持つ姉をかかえて暮らしていた。次第に淋しくなっていく生活がよく描かれている。現実にはかなえられなかつた数々の願いもうかがわれる。

Lambの心は誠実で、清らかであつた。だが彼の晩年は暗い。

先に挙げた『チャールズ・ラム伝』の著者福原教授もそれを認めている。教授は「まるで無明の中に生きていたかという気がする」と述べている。

英文学史上の作家の中で、最も気高い精神の持ち主だった Lamb を取り上げてみたかった。

Bennett が第 5 章で古典の読み方について述べる折、先ず Lamb を取り上げていることは大きな意義を持つことであろう。